

---

# 力の化身

風屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

力の化身

### 【Nコード】

N7691R

### 【作者名】

風屋

### 【あらすじ】

大都市フェルノアで行われたパレード。だが、二〇万人が集まった広場にはテロリストが紛れ込んでいた。突然の爆破音に逃げまどう人々。混乱する会場。しかし、政府軍によって事態はあっけなく収束する。かに思われた。自らをテロリストだと名乗る少女を抱えて剣を振るう青年シルバード・アルケイニア。？力の化身？の異名を持ち世界最高戦力の一つとして数えられる彼が現れたために、本来ならただの反政府組織によるテロ行為、で終わっていたはずの小事が大事件へと発展することになってしまう。

## 純都フェルノア - 1 (前書き)

はじめまして。処女作ですが、御目通しただけなら嬉しいです。

## 純都フェルノア - 1

「皇帝殿下の御通りである!!!」

力強く野太い男の声が、喧騒な広場に轟いた。同時に、集まった二〇万人の群衆がより一層興奮の渦を広げていく。一つ一つ丁寧に造り上げられた煉瓦が道となるこの大通り。世界有数の大都市フェルノアを象徴する名所の一つだ。

しかし、今は観光客どころの騒ぎではない。数十年に一度、という規模の大パレードが行われているのだから。

四足歩行をしながら、成人男性の倍は高さを有すデュオムという陸上生物が籠を牽く。個体によって毛並みにいくつかの種類があるデュオムだが、パレードの中央を歩くのは白銀の体毛。構造的には馬と変わらない身体で牽く籠には皇帝アレハム・クアドハイトその者が乗っていた。

自らを乗せるデュオムと同様、背中まで垂れる長髪は銀色。赤を基調とした式典衣装には豪華な刺繍が施されていた。初老と呼べる年だが、あまりしわのない顔はまだ壮年のようでもある。

彼は道を取り囲む形で群がっている民衆に手を振り続ける。二〇万の人間を集められる人気は為政者というより偶像アイドルのようでさえあった。だが、その人気は為政者としての能力によって作られたものだ。

ここ数年の間に激化してきたこの大陸の戦争に終止符を打ったのがクアドハイト帝国なのだ。終戦はこの国だけでなく、大陸の人間全てを救ったと言っている。

その英雄が間近で見られるというのだから人が集まらないわけがない。また、クアドハイト国民だけでなく他国からも多くの人がやって来ていることだろう。

管楽器を吹き鳴らし、打楽器を打ち鳴らす真っ赤な服を着た演奏

隊。

全て鉄で造られた鎧と剣、中には銃器を持つ者もいる軍隊。

演奏隊の奏でる音楽がより華美に、前後を固める兵士達がより荘厳にパレードを盛り上げている。天までもが祝福するかのようになつた青な明るい空を映しだし、パレードは成功と呼べるものになつただろう。

もし、彼らが現れなかったのなら

演奏隊の演奏が途切れてしまうほどの爆碎音が広場の一角から放たれた。

突然の出来事によつて群衆は途端にパニックに陥る。なにが起つたかわからない、しかし明らかに悪意を持って行われたであろうその爆破に人々は過敏に反応した。ところどころから聞こえてきた叫び声はすぐに伝播し、大群衆のうねりとなつて更なる混乱を引き起こす。

「落ち着いて下さい！ 皆さん、落ち着いて行動を！」

あちこちで兵士達が対処に当たるが、しかし、二〇万という数はたつた一万の兵士達に止められるものではない。

爆発自体は大きかったものの、煙は上がっていない。不思議なほどに静まり返っている爆発地点にただ一つ言えることは、そこに人は残っていないということだけだ。

「今だ！ 行くぞ！」

と、群衆に紛れて交わされた合図。兵士の僅かはそれを確かに聞き取り、すぐに最悪の想定に辿り着く。

「テロリストだ！」

否。

すでにわかりきっていた想定が確証に変わったというところか。首謀者の素性も目的もなに一つわかりはしないが、それでも彼らは大陸規模の大戦を終結させた国の兵士だ。それだけの訓練を受けている。

彼らはテロリストを捕まえようと群衆の波に紛れていく。もちろんこの人の波の中、一人で突き進むようなことなし。二人一組になり、背中を守り合うように周囲を警戒しながら一人一人の様子をうかがっていく。

しかし、その警戒はまるで無駄のものとなった。

「うおおおおお！！」

皇帝を乗せたデュオムを挟んで、爆破の起きた場所とは真反対から幾人かの集団が大声を上げて突き進んできたからである。真つ直ぐに皇帝に向かっていくのは五、六人ほど。他にも群衆とは明らかに異なる走り方をしている者が二〇人ほど。そのどれもが人とは異なる形の者だった。

ある者は頭に角を生やしたホーンロード。ある者は耳の尖ったエルフドロード。ある者は背に翼を持ったウイングロードで、他にも多くの人外の種族がこのパレードに紛れ込んでいたのだ。

大都市フェルノアはこうも呼ばれている。

？純都・フェルノア？と。

それは人間ヒューマンだけが住むこと、そもそも立ち入ることを許可された都市ということだ。人に近いとはいえ、人外の種族がここにいることは違法以外のなにものでもない。

## 純都フェルノア - 2

「アンドラード非人が！ 純都を汚しやがって！」

兵士達はテロリストの正体を知るなり、俄然勢いづいて剣を振り上げる。その様相はテロリストに対するというより、畑を荒らす動物や、あるいは不逞を起こした奴隷にでも対するようだった。彼らはもとより人外の生物を魔ドラードを持ちし生き物として見なしてはいないのだ。

「アンドラード死ね、非人！」

兵士の一人が最も近くにいた女のエルフドラードに向かって剣突を繰り出す。ただの一般兵士といえども他国に比べれば優秀な兵士だ。速度と精密さを兼ね備えたそれは確実にエルフドラードの首に突き刺さった。

かのように見えた。しかし、実際は首の皮にさえ触れることなく避けられてしまっていた。

全力の一撃を振りかぶってしまった彼には、次にエルフドラードの繰り出す攻撃を避ける術はない。エルフドラードの彼女は紫に光る魔法の弾丸を二発、正確に兵士の眉間と心臓に撃ち込んだ。一般兵士の薄鉄板で作られた装備程度では防御しきれない威力である。言葉を発する間もなく崩れ落ちた同僚に兵士達は駆ける速度を落とした。不用意に近づくことなく、様子を見ようというのだろう。けれどそれも意味はない。むしろ魔法を使えるエルフドラードなどにとっては好都合。

最後にいた数人に追いついた、魔法を使える種族達が次々に詠唱を口にする。

この世に存在する？魔法？という力。それは生物の体内に流れる

？アルマイト？という物質が源となっている。それを様々な形で体外に放出する方法は種族によって異なるが、発声器官を有する種は言を発することによってそれを行う。人もそうだ。

だが、発声器官を持たない種族や、発声器官を持っていないながらも声ではない方法で魔法を発現させられる種族もいる。エルフドラードなどがそこに類される。

様々な方法で放たれた攻撃系の魔法。刃や矢の形をしたそれらは<sup>アンドラード</sup>非人として虐げられてきたことへの怒りを表すかのように次々と人間の兵士達を襲った。人間がどれほどの銃器を生み出そうとも、個体では人間の能力に勝る種族などいくらでもいるのだ。

「<sup>ミステイカ・オーク</sup>魔工兵器だ！ 全隊に告ぐ！ 歩兵は全員退却！ 敵の主要戦力を駆逐するまでは<sup>ミステイカ・オーク</sup>魔工兵器に任せることとする！」

と、大きな地響きが聞こえた直後、逃げ惑う兵士が声を上げた。エルフドラード達によって傷ついているというのに、その瞳には希望の色が濃く映っていた。

同時に、急襲をかけたテロリスト達も目の色を変える。ここからが本当の戦だともいうかのように。

「来るぞ！ 全員散れ！」

ホーンドラードの一人が声を張り上げ、皆がそれぞれ建物の陰に走り散った。つい数分前までパレードが行われていた大通りや広場は一斉に閑散とし、ただ遠くから聞こえるのは巨岩でも落ちたかのような音と振動。

テロリスト達は狭い道を通って？それ？が発する音の方へと向かっていく。やがて、気を抜けば身体が浮いてしまうような尋常でない振動を感じた頃、皆がその姿を確認した。

鋼鉄で造られている全身。下半分は一二の車輪がついた横に長い

長方形、上半身に当たる上半分は円柱型。元は人の形を模すはずだったが、鋼鉄の造物に二足歩行をさせるとするのは非常に不安定らしく、安定するように再設計されたスタイル。

上半身に当たる部分も、頭部は内側からだけ外が見える仕様になっている操縦席があるが、腕という概念はない。細かな作業も可能にするため一〇〇を超えるワイヤーが胴体部の至る所から発射される仕組みだ。

本来ならば困難だった鋼鉄の加工を、いくつもの革新的な技術によって容易にしたため量産が可能になった兵器。大陸の戦を終わらせる際に最も多くの場面で活躍した人間の英知。

## 純都フェルノア - 3

ミスティカ・オーク  
魔工兵器

顔のない頭部がおもむろに路地の一角へ振り向く。

「まずい！！ レニー、避けっ　　！！」

声が上がるとほぼ同時、ミスティカ・オーク魔工兵器のワイヤーが束となり腕のような突起を作る。その先端のまるで銃口のような空洞は、間髪いれずにテロリストが隠れる一角へと向けられた。

そして、移動を許す隙も与えず、そこから大木の太さとなった光の束が槍のように放たれる。息を短く吐く様な小さな音に反して、その衝撃は遠くまで響いた。

数百メートル先まで届く射程の長さ。

煉瓦造りの建物までもを抉り取る破壊力。

そして、無数のワイヤーによって形成される銃身は三六〇度の可動域を有している。

光が収まった後に残るものはなにもなかった。三人はいたはずの路地には血の一滴さえ残ってはいない。

史上最悪の兵器にテロリストは仲間の死を嘆く暇もなく恐れ、足を止め、戦う意志を少しでも削がれてしまった。

「一旦退くぞ！ レニー達がやられた！」

「ちっ、彼女達がやられたらこの作戦は、オルハがやるしかないから退け！ あいつらがいなくともやるしかないんだ！ まだオルハがいる！」

混乱は次々に伝播していき、退却にも後れを取ってしまう。今、生きていた証を欠片も残さず消し去られてしまったのは作戦の要だ

った人物なのだ。集団は散り散りになって路地を駆けていく。  
しかし。

「止まれ！」

しかし、すでに広場から周辺一帯を包囲していたクアドハイト軍。統率の取れた動きで魔工兵器ミステイク・オーグの出勤と同時に包囲を開始していたのだ。

銃口を突きつけられ、彼らにはもはやなす術はない。構えられた後ではいかに詠唱を必要としないエルフドラードといえど、銃弾より魔法を放つ方が遅い。また、魔法的耐性も備えている種族は多くとも金属製の弾丸を跳ね返すような鱗を備えた種族は少ない。

仮に少数が助かろうとも大多数は捕らえられるか、良くても殺されるだけだ。この戦いに彼らの勝ちはなくなった。

明らかな力不足だった。人員も、作戦も、戦力も、全てが足りなかった。

## 純都フェルノア - 4

テロリストの中に一人の少女がいた。

桃色の髪は色に合った甘い匂いを漂わせ、大人になりきっていない顔立ちはおよそ戦場には似つかわしくない。

ただ、どういうわけか彼女は他の者とは違い、銃口を付きつけられてはいない。そもそもまだ路地に隠れたまま誰の目にも触れていないのだ。

オルハ・クリンスタム　そう呼ばれる彼女は外見は人間とன்ற変わらない種族である。

耳が尖っているわけでも、身長が三メートルを越すわけでもなく、本当にハイティーンの少女と同じ。少々背が低くはあるが。

ただ一点、他の種と異なるのは心臓だけ。彼女の心臓はアルマイトの結晶で出来ており、個体差が激しい種族ではあるが平均してアルマイトの体内量が人間の一〇〇倍を越す。

見つかっておらず、自由に動けるといいうこの状況でその能力を充分に発揮できるのならば、あるいはこの状況を打破出来たかもしれない。

しかし、彼女は俯いたまま動こうとしない。

否。

動けないのだ。

彼女は類まれなる才能を持ちながらにして仲間にはさえまともな戦力には数えられていなかった。

彼女にとって戦闘は怖れであり、正面から誰かと対峙するなど出来るようなものではないのだ。

ゆえにオルハはこれまでも戦闘を避け、仲間から罵られようと自身の力を使用することを避け続けてきた。それが多くの犠牲を生み、皆を苦しませていると知っていながら。もしくは知っているからこそ、戦えないのかもしれない。

「だから、だから……止めようって言ったのに………」

目を閉じ、耳を塞ぎ、地べたに座り込んでしまっただけで、彼女は近くで起こっている戦いのことを思うと身体の震えを抑えることが出来なかった。

と、突如響いた銃声。単発ではない連射音が静かになった通りによく響く。

おそらく誰かが抵抗を試みたのだろう。だが、その後銃声が止んでしまったところを見ると失敗に終わってしまったのだろう。

今のでより一層怖れを強くしてしまったオルハは立てた両膝の間に顔を埋めてしまった。がたがたと揺れる身体を抑えることなどものはや奇跡でも起きなければありえない。

そんな状況だったから、彼女は路地の向こうから静かに歩いてくる者にもすぐ気付かなかった。

「その貴様！ なにをしている!？」

オルハはとつさに立ち上がるつもりだったが、顔すら上げられない。自分で死ぬ勇気さえないことを自覚しながら、殺されるなら一瞬で痛みのないようにして欲しい、などとありえるはずのない願望を心の中で必死に唱えつつ流れに身を任せた。

「ゆっくりと立て！ さもなくば撃つ！」

機関銃を構える音が届き、更に身が硬直してしまう。これではもう助かる道はないと、そう思いつつ歯をガチガチと震わせた。そして。

「いいだろう！ 子供とて容赦はしない！」

## 純都フェルノア - 5

そして、無情にも顔すら見ていない兵士はオル八に向けた銃の引き金を躊躇いなく引いてしまった。

銃弾が発される乾いた音が連続で響き、その後には妙な静寂と時が止まったかのような空白が生まれた。

だが、彼女はまだ息をしている。痛みもない。傷一つも負っていないかった。

オル八は不審に思い、すぐさま立ち上がって自らの身体を確認する。銃弾などどこにも突き刺さってはいない。

続いて顔を正面に向ける。

そこには

そこには、一人の男の背中があった。

陽の光に照らされてなお、闇夜を思わせるような髪と服装をして、装飾にはあまりに奇怪な紋様を施されている長大な白銀剣を背負っている。

そして、その前方には二人組のクアドハイト兵。彼らの手には硝烟を吹かす小機関銃があったが、着弾の音はしなかった。

「……………流石、帝国兵だな。逃げ遅れた市民も射殺しようつてのは」

おどけた様子で背中を向けた男が言う。そういえばそうなのだ。

オル八は人間となんら変わらない外見を持っているし、武器を携帯しているわけでもない。市民だと言い張ればある程度のごまかしは出来るはずだ。

けれど彼らクアドハイト兵はほとんど問答無用で撃とうとした。

彼女をテロリストだと認識しているのは彼女自身だけなのだ。この場にいることだって、脚をくじいて動けなくなっただなどと考えれば

不自然ではないはずである。

「なんだ貴様は！ 貴様もテロリストの一員か！」

言い終わらないうちに二人の兵士は得体の知れない男に向けて再び発砲する。その直前。いや、直後だったのか。少なくともオル八にはわからない速さで三つの動作が起きた。

一つは二人の兵士が発砲したこと。

一つは正体不明の黒い男が背中の中の剣に触れたこと。

一つは二人の兵士が、糸が切れたように身体を弛緩させたこと。

それから数秒遅れて二人は地面に倒れてしまった。

その間のオル八の目に映った光景で変わった点は、一瞬前には身体横にぶらさがっていたはずの青年の右腕が今は背中の中剣に伸びているということくらい。

なにが起きたかわからない。

なにを起こしたかわからない。

けれど一つ言えるのは、そびえるように目の前に立つこの青年が原因だということ。

「あ、あの」

「話は後だ」

青年はオル八を抱えるとそのまま倒れた二人をまたいで駆けようつする。

「ま、待って下さい……！」

それをオル八が止める。

「みんなが、まだ……残ってて」

「みんな？ まさか」

言葉を詰まらせる青年にオルハは小さく頷き、彼の腕の中から降りる。

「……みんなは許してくれないかもしれないけど、わたしもみんなの仲間です」

## 純都フェルノア - 6

その言に今度こそ青年の動きが完全に止まる。

そして、ひたすら驚愕を表情に浮かべ、息を飲んだ。

彼が今なにを考えているのか。

自分を助けてくれたとはいえ、それはクアドハイト兵が暴走して  
いたからだ。テロリストの味方をしてくれるわけではない。

そもそも彼は剣を背に負っている。

軍服でないところをみれば正規軍の兵士ではなく、おそらくは傭  
兵が自治組織の一員かなのだろうとわかる。

そんな彼がテロリストの味方をする 것도、力になってくれるこ  
とも、許容してくれることもあるはずはない。

彼の明確な立場はわからないけれど、もしかしたら自分を捕らえ  
なければいけない立場の兵士なのかもしれない。

否。

今この場にいる兵士、というだけでどちら側の人間かは明らかだ。  
たとえ雇われた傭兵だとしても。

「わたしを捕まえるなら」

捕まえて下さい。そう言おうとした瞬間、二人の横に建っていた  
建物が爆発した。

「っ！」

「きゃあああっ！？」

突然のことに二人は身構える。

もくもくと立ち上がる爆煙の向こうには一つのシルエット。

一〇メートルを超す高さのそれは、人をベースに造られはしたも

のの結局人と呼べる形を成さなかつた機械の胴体を持つ。

ドラム缶のような円柱型の胴から突き出すワイヤーはそれぞれが結合し、砲身を模かたどっている。

クアドハイト最高の技術力をもつてして造られた魔工兵器ミスティカ・オークはすでにオルハと青年に照準を合わせていた。

「おい」

「えっ、な、なに」

「じつとしてる」

「きやつ!？」

言うなりオルハを抱え、彼女の返答も聞かず彼は大通りに向けて駆け出す。

そして、ひと一人を抱えているとは思えない速度で魔工兵器ミスティカ・オークから次々放たれる魔法弾をかわしていく。

他のクアドハイト兵が驚きで固まっている間に大通りまで飛び出たしまった彼は、あるうことかそのまま魔工兵器ミスティカ・オークに進路を向ける。

抱えられているがために自分の進む方向さえ決められないオルハにも身を強張らせることくらいしか出来ることがない。

ここまでできたら止めることなど無意味だし、そもそも彼は止まらないだろう。

「ちよ、ちよつとなにを」

「黙ってる!」

声を発すると同時、さらに二つのことが行われた。

一つは魔工兵器ミスティカ・オークが幾十ものワイヤーで作り上げた砲身から強力な魔法を撃ち放ったこと。

一つは青年が跳び上がったこと。

一瞬にして光の束は二人の元へ届き、その直線上数百メートルの

なにもかもを消滅させ。

一瞬にして青年は数メートル離れた建物の屋上へ。

だが、息を吐く間もなく、今度は兵士達からの追撃が始まる。

今の一撃ほどではないが、小さな魔法弾や銃弾が一つの壁を成すように飛んできた。瞬間、目を閉じてしまったオル八だったが、青年の方は違う。

背から引き抜いた巨剣を一閃

白銀の装飾剣は稲光をも上回る光量をその身に纏わせ、その一振りですべてを薙ぎ払った。

「えっ

」

あまりの眩しさに目を開けたオル八にはなにが起きたのか全くわからなかった。ただその結果だけが、数えきれないような弾全てが薙ぎ払われたという事実だけが、そこにはあった。

## 純都フェルノア - 7

「あ、あれはっ      !?」

建物の周囲にいた兵士の一人が声を上げる。周りで起こる驚きのざわめきとは違う様子で。

「あの剣の紋様は？力の化身?!?      ……シルバード!!      シルバード・アルケイニアですっ!!」

ただ一振りの剣技に、その瞬間を見た者全てが絶対的な力を感じていた。

大層な二つ名を轟かせるような傑物にはとても見えないが、その能力は確かだった。

シルバード・アルケイニア。

彼の二つ名はその剣に由来している。剣に刻まれた言葉が広まり、いつしか彼自身の二つ名となったのだ。

刻まれている言葉は      A v a t a r      o f      M i g h t

つまり？力の化身？をそのまま意味する彼は、世界最高戦力の一つに数えられていた。

「力の……化身……?」

訊ねるオルハに青年      シルバードは頷く。

「死んだ名だ。知ってる奴がいるとは」

その言葉にとんでもない、という顔をやるオルハ。彼の二つ名はおそらく世界中に知れ渡っている。どこかの小国の子供達にも、スラム街でその日暮らしをしている浮浪者にも。

ドラードの争いの歴史では、たった一人の強者がそのまま勝敗を決したということも少なくない。彼らは圧倒的な力をもってたびたび戦の歴史を動かしてきた。

世界最高戦力。

その言葉はまさにそのような人物のことを指している。そして、この場にいるシルバードもその一人だという事実。どちらの敵でどちらの味方かということはさておき、この事実がクアドハイトにとってもテロリスト達にとつても大きな衝撃を与えた。

シルバードは辺りを見渡す。クアドハイト兵は、テロリスト達の動きを止めている者以外はこの周囲に集まってきていた。魔工兵器も今は動作を止めている。

(このテロリスト達も戦力になるか？ いや、どちらにしる魔工兵器をどうにかしないとだな)

どうすればここから逃げられるか、考えを巡らせるがその隙もなく魔工兵器は二つの砲身を生み、彼に照準を合わせていた。

「ちっ」

舌打ちをしたシルバードは依然オルハを抱えたまま建物から飛び下りる。次の瞬間には放たれた光の束が当然のように街の建物を易々と溶解した。

そして、彼が地に着くとほぼ同時。二つ目の光の束が完璧なタイミングでシルバードに襲いかかった。

彼は再び剣を唸らせ、圧倒的な光量を纏った白銀の刃が魔工兵器から放たれた光の束を相殺させた。

辺りに響き渡る強烈な破砕音。他のどんな実力者が魔法合戦を繰り広げたとしてもこのような爆発音は生まれないだろう。

地面さえ揺るがせそうな威力に、その場の大多数が身を震わせた。そして、こう思っただろう。この戦いには踏み込めない、と。

なればこそ、シルバードの敵はただ一人。否。ただ一体。魔工兵<sup>ミスティカ</sup>器<sup>オク</sup>のみだった。

小回りが利くか、という意味では機動力に難点があるものの、それを補って余りあるほどの攻撃力を持っている。そして、その難点は周りに数人の兵士を置くことでほぼ解消できる。

## 純都フェルノア - 8

シルバードは内心では分が悪いことを確信していたがそれでも退こうとは微塵も思わなかった。それが彼の選んだ生き方なのだから。

「掴まってる」

「え、は、はいっ」

オルハが首に両手を回し、絞め上げない程度にしつかりと固定されたところでシルバードは一步目を踏み出す。二歩目で周りが驚くほどの加速を、三歩目で目にも止まらぬ速度まで跳ね上がった。

背中の少女がわっ、と驚いたことを気にしつつもさらなる加速でミスティカ・オーク魔工兵器に突進していく。右手で持った剣の柄に左手も添える。

ここでミスティカ・オーク魔工兵器より放たれる次の魔法。今度の光の束は細いが、一度に四本が放たれた。

微妙に角度をずらして避けにくいような攻撃だったが、そもそも避ける気はなかった。

真っ直ぐに進み、直撃してしまう攻撃に対してだけ反撃する。光り輝く白銀の刃。それはまるで吸収するかのように光の束を打ち消してしまう。

このまま肉薄すれば一撃は加えられるし、その一撃でことは足りる。が、そももいかない。すでに彼の前には数人の兵士が詰め寄ってきていた。

良く訓練されている兵だけあり、単身では敵わないとわかりつつもミスティカ・オーク魔工兵器だけは守ろうとする。全員がそう考えるため、結果としてお互いがお互いを生かす形になる。

圧倒的な攻撃力を持つシルバードといえど、手数はそう多くない。真っ先に飛び込んできた兵士の剣を受け流す。一対一ならばここで生まれた隙を突くことが出来るが、続く兵士の剣を受けなければ

ならないためにそれは叶わなかった。

二撃三撃と次々に迫りくる刃を受けていく。練度の低い兵士にはいくらか剣を突きたてることも出来たが、それでも多くを減らすことにはならない。時折介入してくるミスティカ・オーク魔工兵器の攻撃も邪魔だった。

しかし、シルバードもここで討たれるようなら世界最高戦力などと怖れられてはいない。

一瞬の隙を見て彼は剣を唸らせる。刀身が輝くと同時にクアドハイト兵の数人が跡形もなく、あるいは身体の一部を残して消し飛ばす。またミスティカ・オーク魔工兵器の脚部に当たる一部にも掠めていた。

悲鳴というほどでもないが、追撃を躊躇う兵士達。これを好機と思い、シルバードはひとまず飛び退き、建物の上へと駆け上がった。他の建物と比しても高い位置から逃走経路を見つけようとして、そして、その目に映ったものをつい疑ってしまった。

近くからも遠くからも、またどの方向からも集まってくるミスティカ・オーク魔工兵器。その数、実に三二。国内に配備されているミスティカ・オーク魔工兵器の数は五〇に満たない。人類史上最悪の兵器の半数以上をシルバードという一人の人間に対してだけ向けるといいう行為。

常軌を逸していた。

「あ、あれ全部……………!？」

「ミスティカ・オーク魔工兵器だ」

顔面蒼白になっっている背中の少女に、現実を言葉にして突き付けるシルバード。あるいは、それは逃げ出したくなる現実に自身を縛り付けるための言葉だったかもしれない。

これでテロリスト達を解放する意味はなくなった。ミスティカ・オーク魔工兵器相手では彼らは陽動にもならない。シルバードが一人でなんとかしなくてはならなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7691r/>

---

力の化身

2011年10月8日18時46分発行